

2014年5月18日 主日礼拝

説教 禁断の果実
創世記3章1-9節

【東北のキリスト】

クリスチャン新聞福音版5月号に、「もし、今、キリストが、日本に立つとしたら、それは原発事故の地、津波被災地や仮設住宅だ」とあります。ボランティア・ツアーと共にキリストがおられました。このツアーが、もっとも幸いであったのは、このことではなかったでしょうか。

【罪という不思議】

ところが「女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えた」(6)。神さまと共にいるいちばんの幸いから、人は逃れようとする。罪とは、神さまから、愛から顔を背けること。愛されることしか、幸いはないのに、自分から幸いを投げ捨てること、それが罪。罪は私たちの中にある歪みのよう。曲がったラッパが奇妙な音を出してしまうように、愛し合うために作られた私たちが傷つけ合ってしまう。アダムとエバも自分だけは助かろうと責任を転嫁する。愛し合うために造られたのに愛し抜くことができない悲しい姿。これは、アダムとエバが「神のようになり」(5)たいと思い、神さまから顔をそむけたときに起こりました。神さまのように善悪を知ると言いますが、ほんとうは神さまのように知ることが、神さまにしかできない。神さまは悪を知っておられる。けれども、どこまでもその悪に立ち向かうことができる、悪に取り込まれることなど決

してない。けれども、私たちは被造物。悪を知るなら、悪に影響されてしまうのです。悪に関わり合うなら、悪に支配される。そして神さまから顔をそむけることになるのです。

【悪魔のささやき】

蛇とは、いったい何か。実際に悪魔がどういふものかはわからないが、ひとつのことは確か。それは、「悪魔のささやき」としか言いようがない力が、存在すること。人間はみな弱さや醜さを持っている。その弱さや醜さにつけこみ、それを引きずり出して、人を悪い方向に突き動かすものがある。人間を超える、強い力。けれども、その力は、人間を力づくで支配するというよりは、人間につけ込む。弱さや醜さにつけ込むことによって、人間を破滅させる。「あなたがたは決して死にません。あなたがたがそれを食べるその時・・・」(4、5)。神のようになりたい。神のようになって、神の目を気にしないで生きていきたい。そんな人間の弱さにつけ込んだ蛇の「悪魔のささやき」。アダムとエバはこのささやきに突き動かされ、神さまから顔をそむけてしまいました。

この悪魔のささやきはどう対抗するのか。神さまは人を男と女に造られた。たがいに覆い合い助け合うために。アダムはエバに、「ちょっと待て。神さまがほんとうにどう言ったか、思い出そう」と言い、ふたりで、蛇をしりぞけるべき。私たちが兄弟姉妹とともに置かれている。このことが、「悪魔のささやき」に立ち向かうためにもっとも大きな力

です。私たちはたがいのたましいに責任があります。おたがいが神さまから顔をそむけることがないように、神さまのみ言葉を思い出させ合う責任があるのです。

【レーナ・マリア】

あるとき、友だちがレーナに指輪をプレゼント。両腕のないレーナに。そのとき、レーナは、怒ることも出来た。自分をあわれんで泣くこともできた。悪魔はそうせよと、レーナにささやいたにちがいない。けれども、彼女はその友だちと大笑いした。悪魔のささやきに耳を傾けることがなかった。理由がある。レーナは両親から、神さまと共に生きる幸いを聞いて、見て、体験しながら育ち、同じ幸いに生きる友人たちを持っている。だから、神さまが共にいてくださることの喜びは、悪魔のささやきに場所を譲らなかったのです。

【ありのまま】

映画「アナと雪の女王」の劇中歌「ありのまま」は大ヒット中。私たちのほんとうの、ありのままの姿、ありのままの自分とは、何でしょうか。それは神のかたち。愛し合うかたちです。主イエスによって神のかたちを回復していただいた私たち、神の子とされた私たち。そのために、主イエスは十字架でご自分を与えてくださいました。主イエスの血潮によって、主イエスのように愛する者とされた私たちは、そのかたちを投げ捨ててはなりません。たがいのたましいに気を配り合い、祈り合うことが、その秘訣です。